

----- (前回からの続き) -----

機内はやっぱり乾燥している。何度も機内に持ち込んで移動途中に読み続けた本を取り出したが、日本で読んでいたときのページのしなりがなくなって、バリバリになっていた。また、離着陸時に気圧の変化で頭が痛くならなきゃいいけど...

そんなタイチの様子をまったく気にしていないアキコは、深々とシートに身を沈めて、英字新聞に目を通していた。一通り読む記事がなくなると、もぞもぞとシート内で心地よい姿勢を探している様子だ。ビジネスクラスだから多少、余裕はある。そして、『さて』という感じで、好奇心一杯の目でタイチの方を見つめた。

アキコ「さっき、言っていたパソコンの電卓がどうのこうのって、何？」
タイチ「あぁ、あれね。パソコンの電卓って、あんまり使わないよね」

アキコが話し始める前から視線を感じていたタイチは、仕方なさそうに読みかけの本をたたみながら、言葉を返した。

アキコ「マウスで数字ボタンのアイコンをクリックするのはじれったいし、
テンキーを使うにしても、本物の電卓を使ったほうが早いしね」

さりげなく、タイチからの話を促したいアキコだった。

タイチ「実際、Windowsに付属の電卓アクセサリーって、そんな感じだね」
アキコ「でも、そういえば、フリーの電卓ソフトだったら、何か面白いのがあるかもね。...あっ！もしかしてないの？だから作ったわけ？タイチくんは」

アキコは話の勘所を先回りして、結論を見つけ出すのが得意だった。でも、タイチにとっては時折、それが鼻に付くことも事実だった。

タイチ「まぁまぁ、アキは結論を急ぎすぎ。物事には過程が大事なんだよ」
アキコ「じゃあ、フリーの電卓にはあったわけ？面白いのが」
タイチ「全部調べたわけじゃないんだけど、これというのはなかったね。大抵はグラフィックに凝って本物ソックリだったりとか、検算機能だとか、財務会計に強いとか、多少の機能は追加されているけれど、基本的にはWindows付属電卓の延長線上なんだ」

アキコ「ふーん」

タイチ「そのなかにはプログラムもできたり、変数を持たせることができたりするものもあったけど、だからって、その電卓ソフトを使うかという...やっぱり使わないんだよね」

アキコ「Windows付属電卓の機能延長線上にはその答えがないのね。そして、プログラミング機能を持った高機能なソフトであっても何か足りないってことね」

タイチ「そう。で、その足りない何かって何だろう？」

ノッて来たタイチが答えてみてよと、投げた会話のボールだったが、アキコはそっけなかった。

アキコ「降参、わかりません」

タイチ「少しは考えてよ...」

アキコ「だって、タイチくん、答えもうわかってるんでしょ。教えなさいよ」

少しは、なぜそうなったかを楽しんでくれればいいのに...アキの結論を急ぐ性分はビジネスでは仕事が進んで助かる面もあるけど、つまらない面もある。

タイチ「つまり、思うに...。現実の電卓を模倣してもダメってことだよ」

アキコ「なるほど...、それで」

タイチ「リアル世界の電卓は、キータッチ感もあるし、すぐに使えるし、手元に置いておけるし、どんなにバーチャルな世界の、あ、コンピュータの世界のことね。ソフト電卓が本物ソックリに作ったとしてもリアルな電卓には敵わないよね。なのにみんな一生懸命、そういった電卓ソフトを作り続けているんだよね」

熱く語るタイチを見つめるアキコは、ちょっとイライラしている様子だった。話のストーリーよりも結論を急いでいるようだった。

アキコ「ふーん。それで、どうしたいわけ？タイチくんは」

タイチ「コンピュータの上で動く電卓が、リアルな電卓より有利な立場にあるものがあると思わない？」

アキコ「何それ？」

タイチ「何だと思う？」

結論を早く知りたいアキコに、謎掛けが好きなタイチが楽しそうに答えを焦らしている。

アキコ「だから、わからないわよ。早く教えなさいよ」

タイチ「...それは、データの扱いだと思うんだ...」

思いがけなかったタイチの答えだったが、アキコは急に真顔になった。もともと、ウンチクや苦労話には興味がなく、納得できる結論が得られればよしとするタイプのアキコだが、独特のアンテナがあるのか、会話やミーティングの中で、肝心なことが出てくるとピタッと聞き入るスキルがあった。

タイチ「つまり、コンピュータのソフト電卓がデータを扱わおうとしないか

ら、いつまでも使おうって気にならないんだよ」
アキコ「電卓がデータを扱うの？」

少しずつ興味を引かれ始めたのか、アキコが身を乗り出して、疑問を投げかけてきた。顔が近すぎる。それに、その肘掛、僕のですけど…。タイチは追い詰められたウサギになったような気がした。

タイチ「えっと、そう、量は少なくとも多くてもいいけど、数値のデータがファイルとしてあって、それを簡単に電卓で扱うことができたらいいとは思わない？それはリアルな電卓にはできないことだよな」
アキコ「ふーん。なるほどね。面白い着想よね。ソフトウェア＝プログラム＋データの教典どおりの答えにも聞こえるけど、それって大きなアプリケーションって感じじゃないのよね？」

何の事はない。結局、アキはコンピュータが好きなんだ。彼女の場合、職業だから当然といえば当然だけど、普通、女の人あまりこの手の分野には関心がないのに…。別の機会に、なぜコンピュータが好きになったのか聞いてみたいとタイチは思った。

タイチ「そうそう。あくまで電卓は電卓だから、そんな凄い柔軟性や多機能性は持たせない。なのにデータを捌いていく。そんな感じ」
アキコ「何だか、汎用化が大変そうよね。ある程度の計算にも使えないと面白くないし、かといって複雑にするのは本意に反するし…。それに仕様化にも時間が掛かりそうね…」

アキコの頭はすっかりお仕事モードだった。

タイチ「そうだね。結構、時間掛けたから。作り始めてからもう10年目だし」
アキコ「ええっ！ジューネン！！」

考えられない…。やっぱり、敵わないところあるよ、この人には。マメとかマメじゃないを乗り越してる…。その長さは仕事でも普通ないよ。アキコはその掛けた年月を思うと、どんなことができる電卓なのか興味津々になった。

タイチ「ファイルに収まっているデータを使って、ある程度の計算ができるだけでも今までにないソフト電卓の出来上がりだった。でも…」
アキコ「でも？」

いつになく、アキコが相槌を打つのは、かなり真剣になっている証拠だった。

タイチ「そのうち、データによっては条件分岐や再利用が必要になって、プログラミング機能も持たせたけど。あと、いろいろ必要不可欠と思うものを付け加えていったよ」
アキコ「プログラム可能なソフト電卓ってことね」

タイチ「そう」

そういえば、デザインにはプラスとマイナスがあって、マイナスのデザインの方が難しいって、よくタイチくんが言うけど、必要不可欠なものって、同時にそうでないものを機能から殺ぎ落としていくわけだから、センスがいるのよね…。このソフト電卓はきっとマイナス型のデザインなんだろうなとアキコは確信した。

タイチ「でも、実際は難解なプログラムが必要とか、ファイルからだけしかデータを利用できないと簡便さに欠けるんだ。やっぱり、すぐに計算もしたい。だから、計算式をタイプするとすぐに計算できるようにもなるべきだ。例えば、逆ポーランド式の「1 2 * 3 +」も直接受け取って計算できるようなものさ」

アキコ「ふーん。それを作ったわけなんだ」

タイチくんといると議論もするけど正直、楽しい。でも、実は軽い嫉妬を感じることもある。今みたいに。彼にあって私にないものって、独創性なのかな。アイデア、実現性、論理性、たまに別格だと思うことがあるわ。

タイチ「それでね、アキ…」

今度は、妙に悪戯っぽくウキウキした顔で、また宝物を出すようにカバンから、タイチ愛用のノートパソコンを取り出した。

アキコ「な、何よ。持ってきたのノートパソコン？」

タイチ「バゲージでトラブルあると困るしね。それでさ、これ見てよ」

サスペンド状態だったらしいノートパソコンは、タイチが数回のキータッチですぐに稼動状態になった。まだ夕食前の機内は明るく、Windowsパソコンの画面の明るさは馴染んでいた。そしてその画面の真ん中に黒いウィンドウが開かれていた。

アキコ「あら、それ、MS-DOSプロンプト？」

タイチ「そう。作ったソフト電卓はDOSの上で動くんだ」

タイチが簡単にキータッチすると、画面には次のように表示されていた。

```
>rpn 2 3 + 4 *
```

アキコ「ふーん。2、3、+、4、*は逆ポーランド式だけど、rpnって何？」

タイチ「逆ポーランド記法ってこと」

アキコ「えっと、Reverse Polish…。あ、Reversed Polish Notationね」

タイチ「やっぱり、アキって英語得意だよな。それが作った電卓の名前だよ」

もっと独特の名前を付ければよかったのに…。そう言おうと思ったが、よくよく考えれば、とてもタイチらしい実直なネーミングに妙に納得したアキコだった。

タイチ「ここで、ENTERキーを打つと…」

画面にはタイチがENTERキーを押した後の数字が表示されていた。

```
>rpn 2 3 + 4 *  
20
```

アキコ「あっ！」

タイチ「逆ポーランド式を計算したでしょ」

アキコ「ほんと？面白そうじゃない！…じゃあ、これはどうするの」

アキコは取り出したメモの数式を指差した。空港でタイチが出した問題だ。

```
      4  
-----  
1 + 2 × 3
```

タイチ「こうなるね」

```
>rpn 4 1 2 3 * + /  
0.571429
```

今度は真っ黒いDOS窓に、答えの小数が表示された。

アキコ「へえー。正直、すっごい、地味なんだけど…。あっ、いや、でも、面白いよ。ほんとに」

アキコは自分の発した言葉にハッと行って焦りながらフォローした。形がどんなものであれ、独自で価値があるものには敬意を表するものだと言っていたことを思い出したからだ。幸いにも、タイチはそんなことはまったく気にしない様子だったが、アキコは思ったことをすぐに口に出してしまう性格を恨んだ。

ノートパソコンを閉じようとしたタイチに、ちょっと待ってと目配せしたアキコ。興味が出てきたときのしつこさはピカイチだ。

アキコ「ところで、逆ポーランド式って、とかってあるの？」

タイチ「あるよ。っていうか、自作の逆ポーランド電卓にはあるよ」

アキコ「ふーん。じゃあ、2ってどうするの？」

タイチは質問には答えなくて、直接キーを叩いた。画面にはその逆ポーランド式と答えがあった。

```
>rpn 2 r
1.41421
```

アキコ「へー。面白い。『r』ってROOTの略？すると 記号も逆に書くんだ」
タイチ「そう。興味深いことに普通の電卓って、ルートの時だけは逆ポーランド式だよ。2のボタンを押してから 記号のボタンだよ」
アキコ「それじゃあさ、これはどうなるの？」

興味ありありに目を輝かせて、メモにルートが入った分数式を書いた。

$$\frac{5}{(2 + 3)}$$

タイチは、また直接キーボードで答えた。

```
>rpn 5 2 3 + r /
2.23607
```

アキコ「おもしろーい！全部、逆ポーランド式で書けるんだあ」
タイチ「 $\times \div + -$ といった四則演算以外の演算記号を含んだ逆ポーランド式に正式な書き方があるかどうかはわからないけど、自作のソフトだから全部、僕が独自に定義したんだけどね」

タイチの説明を聞いたか聞かないうちに、アキコはメモに複雑怪奇な式を書き始めた。

$$\frac{1}{2} \frac{e}{2} \frac{3}{2}$$

アキコ「それじゃ、これはどう書くの？」

メモを書き終えたアキコは、複雑な式がどんなふうに変わるのかを知りたい一心という眼差しで、タイチの指先がキータッチするのをじっと見ている。

タイチ「これって、ガウスの正規分布だよな...」

さすが、タイチくん。で、どうするの？アキコは待ちきれない様子だった。タイチは少しだけ考えて、一気にキータイプしていった。画面には次の数式が残っていた。

```
>rpn 1 2 3.14 * r / 3 . * 2 / m e *
```

アキコ「えっ、これって...。何なの？」

タイチ「 の数値はソフト電卓に組み込んでないから、定数だけだね」

申し訳なさそうにタイチは話したが、アキコはそんなことはどうでもいいという感じだった。画面に残っている情報で、何とか逆ポーランド式を解読しようとしていた。

タイチ「自作の電卓だから独自の記号があるよ。だから、今、アキが理解しようとしても無理だよ」

アキコ「ふーん、そうなの？でも、何だかよくわからないけど、面白いわ。とにかく、どんな式でも逆ポーランド式には変換できるみたいね。ENTERキー押していい？」

急にアキコがタイチの前に手を伸ばして、膝の上のノートパソコンを叩こうとした。ビジネスクラスといっても狭い。タイチとの微妙な距離感が、ほのかにアキコの好む香水を感じさせた。

アキコ「出た！あってるのかな？」

```
>rpn 1 2 3.14 * r / 3 . * 2 / m e *  
0.00443185
```

アキコが画面に残った数式と答えを見ながら、何やら手持ちの電卓で検算に夢中だった。

アキコ「数値誤差は仕方ないにしても、大体あってるね！」

タイチ「うん、まあ、そうだね...」

アキコ「すごいじゃない！面白いよ、これ。まだまだ機能があるんでしょ？」

好奇心の塊となったアキコにたじろぎ気味のタイチだったが、スチュワーデスが夕食のメニューを聞きに来たのを幸いに、ノートパソコンをそそくさと片付け始めた。

タイチ「えっと、後は食べてからにしよ。それと...」

アキコ「なに？」

タイチ「僕の方も頼んでね。チキンじゃなくて、フィッシュでお願い」

どうも英語は苦手。なるべくなら話したくないタイチだった。

----- (つづく) -----

Copyright(C) 2005 rpn hacks! All rights reserved